

あとがき

今回はジャスパー・ジョーンズ Jasper Johns (1930～)の版画展である。ここ数年にわたって、当画廊がコレクトしてきた版画作品20点余を展示している。

この展覧会の大きな特徴は、その展示作品のすべてが1960年代の作品に限定されていることであって、これは当画廊の当初からの意図に基づくものである。1960年を中心とする十数年間はアメリカの現代美術がもっともアクティブで高揚した時代である。(どういうわけか我が国も同様であるのは面白い。)その時代の輝ける旗手がJ.ジョーンズである、と言っていい。この時代の彼の作品は緊張感に溢れ、美しい。それは私を興奮させるのである。一体かくも私を興奮させるジョーンズの魅力とは何なのか? 思うにそれは二つあると思う。ひとつは主題(モチーフ)からきているに違いない。彼が使用するモチーフは具体的なものであるが、一步踏み込んで点検するとそれらは中性的、無機的、普遍的、象徴的、記号的、平面的であることが分る。すなわち、ターゲット、フラッグ、マップ、ナンバー、アルファベット等々である。それらは一種同時代的な瞑想を伴って観念の世界に私を誘い、陥ち込ませるのである。と同時にもうひとつは彼の抜群にすぐれたドローイングによってこれら無言のモチーフは生き生きと語り出すのである。ジョーンズのドローイングの動きと、モチーフの物質的な静けさの組合せが、私をかくも興奮させる原因なのだと思う。60年代前半の石版の何点かはその

魅力を充分示して余すところがない。

またジョーンズは同じモチーフ——例えばターゲット——をエンコスティック、ドローイング、石版、銅版、シルクスクリーン等各種のメディアを使い、繰り返し、繰り返し作成している。モチーフが限定されているが一つのモチーフについてそれぞれのメディアの特質を生かして丁寧に作られているので作品の表情はおのおのに美しい。デザイン的なパターンの繰り返しに堕ちていないところがジョーンズの力量の優れている所以であろう。

ところで、昨年11月のニューヨークにおけるサザビーやクリスティズのオークションにおいてJ.ジョーンズの値段の高いことが大きな話題となった。すなわち彼の1959年のエンコスティックの作品 *Out the Window* (138.5×102cm) が3,630,000ドル——エスティメート価格のほぼ倍——で落札されたのである。邦貨換算約5億8,000万円(@160)となる。手数料10%を加算すると実に6億3,900万円になる。その他の彼の作品もエスティメート価格の2～3倍で落札されているので、これはひとつの事件といっている。まあ、価格は需要と供給のクロスするところで決まる訳であり、特に美術品市場はその商品の特性上不完全競争市場の最たるものであるから、こういうことがあっても不思議ではない、と達観して眺めるほかないが、それにしてもそのフィーバー振りには驚かざるを得ない。ジョーンズなしにはアメリカの現代美術は成立し得ないといった感があり、彼は神話的な存在となってしまった。これは喜ぶべきことか悲しむべきことか、それはそれぞれの立場によって異なるであろう。いまはひとつの現実として受けとるほかない。ただ私としてはこんなことに関係なく、ジョーンズが今後ますます精一杯仕事をして、優れた作品をわれわれに見せてくれることを希うばかりである。

最後に、今回のカタログのテキストは評論家の篠田達美さんをお願いし、「旗」がハタメクとき

と題する力のこもった文章をご寄稿いただいた。ジョーンズの仕事の意味を理解する上でまたとない示唆に富んだ文章である。皆様にぜひ御一読いただきたいと希っている。篠田さんと英訳をしていただいた小川ハル子さんに厚く御礼申し上げる次第である。

1987年2月12日

佐谷画廊

佐谷和彦